臨床レポート

# 漢方薬と鍼灸の併用について

愛知県半田市　住吉堂漢方ラウンジ／住吉堂鍼灸院
榊原　哲

**【諸　言】**

古来より、漢方薬と鍼灸が併用されることで、伝統医学は発展してきた歴史がある。孫思邈（581 － 682）は『備急千金要方』の中で「鍼灸を知り、薬を知ってこそ良医である」といい、その理由として「薬で身体の内側から治療し、鍼灸で身体の外側から治療すれば、病気の逃げるところはない」と書いている。

漢方治療と鍼灸治療を比較すると、前者は漢方薬を内服することで身体の内側より臓腑・気血津液の調整をすることができ、鍼灸治療に比べて補うことに優れている。後者は、鍼灸を施すことにより身体の外側から経絡を通じて臓腑・気血津液の調整をすることができ、漢方治療に比べて疏通経絡や気機の調整に優れているといえる。この二つの治療方法を組み合わせることで治療効果を増強し、持続させる相乗効果を期待できる。

中医学が基本とする弁証論治の過程には、漢方治療の場合は「理・法・方・薬」、鍼灸治療の場合は「理・法・方・穴・術」という弁証過程がそれぞれにある。両者は「理·法·方」までは同じ理論体系において病態把握をするため、両者が同じ視点に立ち、内側と外側からアプローチができることから、相乗効果が期待できる。それゆえ、クライアントの病態把握する上で大切なポイントは、両者の治療において中医学的に情報を共有して弁証することと考えている。

また、相乗効果だけでなく漢方治療と鍼灸治療がそれぞれで役割を分けることも可能であると考えている。中医学には「標治、本治」という考え方での治療方法があり、標治は表層的な現象の治療で対処療法であり、本治は疾病の本質を治療する治療法と考えられている。この場合、鍼灸は標治を得意とし、漢方は本治を得意とするため、役割を分担することができる。

その他、鍼灸治療では各種の疼痛、しびれ等の疾患においては、経筋の緊張を取り除くことで気機をスムーズに流すことができるので、これらの治療を得意としている。このように気機の失調からくる病態に鍼灸を適応させることで、漢方薬単独ではすぐに効果が発現しにくい気・血・津液の停滞する病態への対応が可能になる。

さらに鍼灸治療の根本といわれている「胃気を調節する」ことでは、漢方薬の体内への吸収を高めて、薬効を引き出すことができることも大きな特徴といえる。

今回、月経痛における漢方薬と鍼灸の併用による相乗効果の一例を提示し、考察を加えて報告する。

**【症　例】**

**患　者：**23 歳　女性
**主　訴：**月経痛
**既往歴：**アトピー性皮膚炎、月経不順
**現病歴：**15 歳頃より受験を機にアトピー性皮膚炎が悪化し、頸部及び項部、肘窩部など比較的皮膚の柔らかい場所に鮮紅色の皮疹が出現する。時期を同じくして月経も不定期で安定しなくなった。折衝飲エキス細粒（松浦薬業）4g 分 2 ＋加味逍遙散エキス細粒（松浦薬業）4g 分 2 ＋六味丸エキス細粒（松浦薬業）4g 分 2 と、月経痛時は頓服にて芍薬甘草湯エキス細粒（松浦薬業）2g を服用し、アトピー性皮膚炎、月経痛ともに落ち着いている。

**現　症**：200X年10月8日に月経来潮するが、いつもより体調が悪い、月経痛（+++)、下痢、めまい感があり、ソファーで仰向けになり冷汗をかきながら、下腹部をおさえて痛みを我慢していた。
**望　診**：顔色は白(血の気が引いている様子)
**舌　診**：やや紅舌、白苔、舌下静脈瘀滞
**脈　診**：渋、細数、弦
**弁　証**：下焦血瘀
**治　法**：活血化瘀、理気行血、解痙止痛
**処　方**：芍薬甘草湯
**配　穴**：合谷、足三里、三陰交、血海
**経　過**：頓服用の芍薬甘草湯を1包服用するが、今回はいつものように1時間経過するも痛みが和らいで来る気配はない。そこで合谷、足三里、三陰交、血海にステンレス鍼（セイリン製）0.18mm × 40mm を直刺で深さ7mmにて10分間置鍼する。「置鍼している間に、月経痛がスーッと消えていくのを感じた」と言われ、10分経過する頃にはすっかり痛みが取れた様子で元気を取り戻した。また「刺鍼中でも鍼が刺入されている感覚があまりなかった」と感想を言われた。

## 【考　察】

月経痛がいつもよりひどかった理由は月経が不定期のためと考える。素体は気滞血瘀・肝腎陰虚であり、とくに気滞血瘀が月経痛の痛みを強くしていると考えた。普段より、折衝飲にて活血化瘀をし、加味逍遙散にて疏肝理気をして気滞血瘀をコントロールできていた。そのため、芍薬甘草湯で解痙止痛を試みるが、効果発現まで時間がかかることを考慮して、今回は鍼灸治療を併用したことで相乗効果に至ったと考えられる。

鍼灸治療における三陰交は肝・脾・腎経の交会穴であり、血証の要穴でもあるため、血瘀への対応と肝・腎経の疏泄を目的とした。血海は下焦血瘀を目標に活血をした。合谷・足三里は行気止痛を目的として、気機疏通を狙って配穴した。その結果、気血の疏通がのびやかになり、止痛することができた。さらに、芍薬甘草湯の解痙止痛効果も高めたと推測できる。

## 【結　語】

漢方治療と鍼灸治療の併用治療は、医師であれば可能であるが、薬剤師・登録販売者の免許では鍼灸治療はできない。また鍼灸師の免許では、漢方薬を販売することはできないという制度の壁がある。今後、併用治療の発展のためには医師・薬剤師・登録販売者・鍼灸師の信頼関係と連携が大きな課題となってくると考える。

### 〈参考文献〉


1）孫思邈；備急千金要方，人民衛生出版社（1995）
2）中医臨床，35（3），(2014）
3）天津中医学院・学校法人後藤学園 編；針灸学［基礎篇］，東洋学術出版社（1991）
4）東洋療法学校協会 編，教科書執筆小委員会 著；東洋医学概論，医道の日本社（1993）
5）伊藤良・山本巖 監修，神戸中医学研究会 編；中医処方解説，医歯薬出版社（1982）
6）呂景山；鍼灸対穴臨床経験集，山西科学技術出版社（1986）
7）山西医学院李丁・天津中医薬大学 編，浅川要 他訳；鍼灸経穴辞典，東洋学術出版社（1986）
8）高金亮 監修，劉桂平・孟静岩 主編，中医基本用語辞典翻訳委員会 訳；中医基本用語辞典，東洋学術出版社（2006）
9）素問・霊枢・難経，たにぐち書店（1996）